

1

2022年11月10日
 岩手県東日本大震災津波復興委員会・第32回総合企画専門委員会
 広田提出資料

岩手大学「三陸の研究」(第3回) 東日本大震災とは

東日本大震災の被災状況、現状と課題、および教訓について包括的に解説する。

2022年10月31日実施

広田 純一

(NPO法人いわて地域づくり支援センター・代表理事 Univate
 (元岩手大学地域コミュニティ再建支援班長) 岩手大学

3

3. 直近の課題

2

目次

1. 被災の概要
 2. 復興のプロセスと現状
 3. 直近の課題 → **ここを抜粋**
 4. 地域コミュニティの再生
 5. 震災復興から地域創生へ
 - 震災から得られたもの
- 参考資料：震災の教訓

4

(1) 心のケア・生活の再建

- ・ **心のケアは長期戦。**
- ・ **住宅再建後の生活の再建にはなお課題。**

被災者の方の心の回復については人によって回復された方もいれば、“まだ”時間がかかる人もいる。そういう方へのケアをどうしていくのが重要だと思います。
 (沿岸南部・40歳代・男)

衣食住等、ハード面は回復しているが、心の回復がまだまだの様子が見られる方々が見受けられる。(沿岸北部・60歳代以上・男)

三陸道の全線開通間近。復興住宅移転や戸建て住宅再建は進んでいるようだが、賃貸料や住宅ローンに苦慮していることを聞くことがある。(沿岸南部・50歳代・男)

(岩手県復興ウォッチャー調査：2022年1月)

5

(2) 地域コミュニティの再建

- ◆住宅再建はほぼ完了したが、コミュニティづくりに課題。
- ◆とくに災害公営住宅では、知らない者同士が入居。外部者の支援が不可欠。

個々の生活は回復したと思うが、コミュニティが不足していると思われる事がたまにある。高齢者が集まる場所がないのか、朝、道の駅内で雑談している高齢者が多くなった。(沿岸南部, 60歳代以上, 男)

住環境については高台への移転新築、災害公営住宅への入居等により、生活面は落ち着いたと感じる。高齢者及び独り暮らし世帯に対するコミュニティサポートは引続き必要と考ええる。(沿岸南部, 50歳代, 男)

新型コロナウイルスの影響で、新しいコミュニティ形成が進まない。(沿岸南部, 40歳代, 男)

(岩手県復興ウォッチャー調査: 2022年1月)

6

(3) まちの賑わいの創出

- ◆市街地のかさ上げ・区画整理が完了
- ◆中心部には空き地が目立ち、見通しが立たない状況も



大槌町中心部区画整理地区
(nippon.com 日本情報多言語発信サイト、
2021年3月10日)

だいぶ元の町のようになりました。中心地の空地は気になりますが... (沿岸南部・50代・女)

仮設住宅の撤去も完了し、各々自力再建も進み回復へ一歩一歩前進している。一方で空き地や売り地の空間も多々見られ、見通しが立たない状況も目につく。10年経過と年齢的なものも絡み、なかなか再建したくても経済的な余裕がない人達もいると思います。(沿岸南部, 50歳代・男)

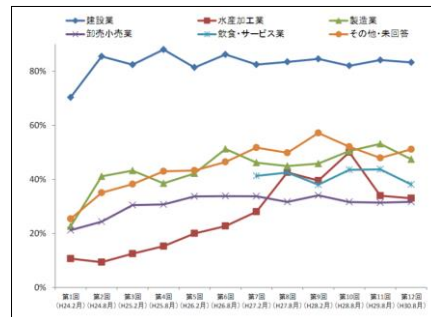
生活の回復は進んでいるとは思ってます。だが、私を見る所は、自分の土地にて住むのではなく、公営住宅の方が多く、元地が空地が多く成ってます。(沿岸南部・60歳以上・男)

(岩手県復興ウォッチャー調査: 2022年1月)

7

(4) 産業の復興

- ◆震災後、建設業が地域の経済を牽引。復興工事完了に伴って復興需要は激減。
- ◆深刻な不漁、水産加工工業に大きな打撃。
- ◆主に水産業は、本来は今時期に水揚げのあるサケ・アワビが大不漁で、漁家及び加工業者は大変苦しんでいる。(沿岸北部, 39歳以下・男)



(岩手県復興ウォッチャー調査: 2022年1月) 現在の業績が震災前と同程度又は上回っている事業所の割合 (岩手県「被災事業所復興状況調査」2018年8月)

8

(4) 産業の復興

- ◆復興需要が減少しているので、その面で仕事の量は減ってきている。コロナの影響で、飲食店の経営は厳しい。(沿岸南部・40歳代・男)
- ◆地域経済の回復は、今現在は最も苦しい状況です。水産業、商工事業所、年々海の状況はわるく考えられないようです。サンマ、イカ、アワビ、その他大不漁です。なんとかご支援をお願いします。(沿岸南部・60歳以上・女)
- ◆復興道路の完成と共に地域経済は衰退して行きそう。コロナの影響もまだまだ続く。地域の高齢化もどんどん進んで行く。買い物は他の地域へ行く。仕事も他の地域へ。(沿岸北部・50歳代・男)

(岩手県復興ウォッチャー調査: 2022年1月)

(5) 人口減少

- ・災害公営住宅の入居が完了し、自己再建の住宅も建ち揃い、住まいの確保は出来たように見受けられる。一方、災害公営住宅からの退去者が始まっており、空室が目立ち始めたところがある。地区の人口は2,800人になり、震災前の63%まで減少し、高齢化と少子化の流れは留まることはなく、限界集落に近づきつつある。(沿岸南部・60歳以上・男)
- ・住宅、防潮堤、道路の整備はされているが、人口減が大きく、元気、活気が減じていると感じる。(沿岸南部・40歳代・男)
- ・(沿岸南部・39歳以下・女)
- ・「商業は人口減少、三陸道の延伸等により仙台圏や内陸圏に流出している。建設関連の復興需要は収束しつつある。」(沿岸南部・50歳代・男)

(岩手県復興ウォッチャー調査：2022年1月)

(5) 人口減少

- ・全国平均を大きく上回る人口減少。
- ・岩手県内陸と比べても、倍以上の減少。

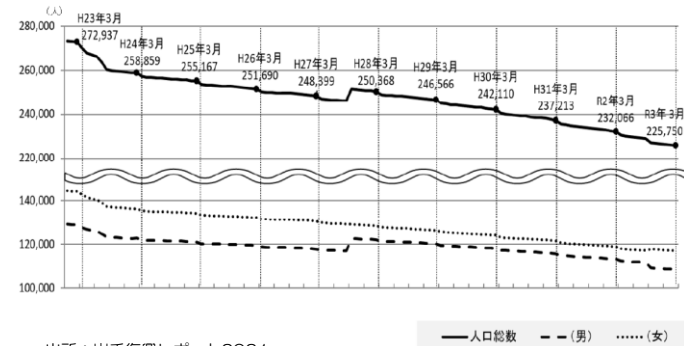
区分	平成22年		平成27年		令和2年(速報値)				
	人口	人口	対前回(H22)		人口	対前回(H27)		対前々回(H22)	
			増減	増減率		増減	増減率	増減	増減率
全国計	128,057千人	127,095千人	▲963千人	▲0.8%	126,227千人	▲868千人	▲0.7%	▲1,831千人	▲1.4%
県計	1,330,147人	1,279,594人	▲50,553人	▲3.8%	1,211,206人	▲68,388人	▲5.3%	▲118,941人	▲8.9%
内陸計	1,056,061人	1,028,129人	▲27,932人	▲2.6%	983,975人	▲44,154人	▲4.3%	▲72,086人	▲6.8%
沿岸計	274,086人	251,465人	▲22,621人	▲8.3%	227,231人	▲44,234人	▲9.6%	▲46,855人	▲17.1%

震災5年目以降の方が人口が減少している。

出所：岩手復興レポート2021

(5) 人口減少

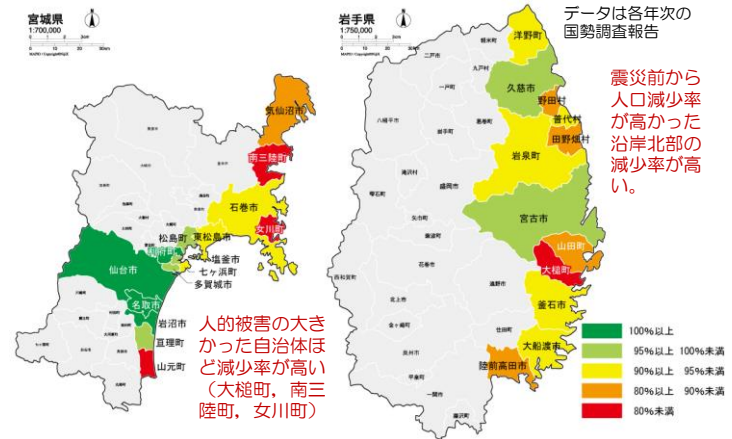
- ・沿岸市町村の人口減少は、近年加速。



出所：岩手復興レポート2021

被災地の人口増減率

2010年人口に対する2015年人口の比率



13

(6) 新型コロナの影響

- 震災復興が進む一方で、新型コロナによる影響が、生活・コミュニティ・産業等の再建に大きな影響を与えている。

震災後に回復した生活が、新型コロナウイルス感染症の影響で逆戻りした部分があるように感じる。(沿岸南部・50歳代・男)

- 住宅、三陸道等、回復の様子は見られる。一方、最近は、コロナ禍の影響により、回復の進み具合は鈍化していると感じる。(沿岸北部・40歳代・男)

- コロナの影響で、アルバイト・パート先がなくなったり、コミュニティ再生のための集いがなくなっている状況。人とのつながりはうすく感じられます。(沿岸南部・40歳代・女)

(岩手県復興ウォッチャー調査：2022年1月)

15

岩手県津波復興委員会・総合企画専門委員会の委員の言葉

- 昭和の津波以降、様々な防災対策を進めながら何故6千名以上の犠牲を出したのかの検証は十分でなく、二度と災禍を繰り返さないためにたすべき施策を模索し、**災害文化の醸成**を図る取組をすすめてはならない。(齋藤徳美：岩手大学名誉教授)
- 明治、昭和の三陸津波、チリ地震津波、これだけの被害を受けてきた地域なのに、**なぜ、またしても死者・行方不明者合わせて6,200を超える尊い命が失われてしまったのか？**我々は、いったい何をしてきたのだろうか？(若林 治男：発災当時 岩手県県土整備部道路都市担当技監)

14

(7) 震災の伝承

- 被災地の次の世代、そして次の災害想定地への教訓の伝承が極めて重要
 - すでに津波が過去のモノになりつつある(被災地)
 - 他地域ではまだ危機感が足りない(災害想定地)
- 震災遺構の保存と活用
- 津波伝承施設の建設と運用
 - 東日本大震災津波伝承館(いわてTSUNAMIメモリアル)等
- 津波伝承の総合的取組(宮城県)
 - 震災遺構・伝承施設のネットワーク化
 - アーカイブの連携・ネットワーク化
 - 取組主体の連携・ネットワーク化

今のやり方で十分か？

16

首藤伸夫先生(元東北大学教授)の言葉

- 津波対策っていうのは結局発生する頻度がそんなにないものだから、やっぱりいろんな部署でも住民の間でも**とにかく忘れられてしまうっていう事がね。いちばんの難問題**なんですよ。
- (東日本大震災について)今のところみんながこんな大きなものがあり得るという事をね、一応確認したという意味はあると思いますよね。
- だけど、もうあれから2~3年たって、例えば岩手県あたりでもね、住民の半数はどうも記憶の風化が始まっているという事を強く感じているとかね。だから今までの例で言ってね、5年ぐらいからどンドンどンドン記憶が風化して行って、**8年もたちますとね、だいたい前の事は知っていても、それを無視したような生活に戻る。**

NHK 戦後史証言アーカイブス「津波研究50年」, 2013年。

首藤伸夫先生の言葉（続）

- 本当に十年一昔ってよく言ったものでね。10年たつとだいたい前の経験がね、本当に繋がらなくなる。
- それは何故かっていうと、そういう事を知らないその地震の後で生まれた方なんていう方が増えてくるでしょう。それがね、本当にどこまで繋がっていくか。それを繋げていくシステムになっているかですね。
- 大きな構造物をつくったら、構造物としての強度、機能を維持する。それこそ100年、200年維持しないといけない。
- と同時にね、人の心が変わっていくのをね、何とか押し止めて、何かあればやっぱり逃げるんだというね。大きいものがあるからかえって人が死ぬって事に繋がりが兼ねないんですよ。

NHK 戦後史証言アーカイブス「津波研究50年」, 2013年。

どうすればよいのか？

- 子供はおそらく大丈夫（←学校での津波防災教育）。
- 問題は大人
- いまの津波伝承で大丈夫か？
 - 「忘れないこと」が単なるお題目になっていないか？
- むしろ避難（訓練）の日常化が必要ではないか？
 - たとえば、津波注意報が出たら、地域内のすべての業務を即刻停止して、全員が高台等に避難する、とか。

津波伝承キャラバン（広田・望月ら）

- 目的：南海トラフ地震に伴う大津波が想定される地域を対象に、東日本大震災の津波被害と復興の経験を伝えることを通じて、一人でも多くの住民の方々が早期避難の重要性を理解し、躊躇なく避難できるようにすること
- 日程：2019年8月19日（月）～23日（金）
- 場所：高知県黒潮町および和歌山県串本町の10集落

和歌山) 津波 早期避難が重要 岩手の被災者が語る

有料会員登録
東孝司 2019年8月23日 3時00分

シェア ツイート ブックマーク メール 印刷

list



東日本大震災の巨 大津波 で被害を受けた岩手県 大槌町の 町内会長や 岩手大学の研究者らが22日、和歌山県 串本町内の3カ所の公民館を訪れ、南海トラフ地震で津波被害の恐れのある沿岸住民に「教訓」を伝えた。

震災復興に取り組む 岩手大 農学部 広田純一教授（64）＝農村・地域計画学＝が中心となり、早期避難の重要性を訴えるために始めた「いわて津波伝承キャラバン」。19、20日と高知県 黒潮町内を回った後、串本にやってきた。

津波被災の経験を語る岩手県大槌町の町内会長の佐々木慶一さん。2019年8月22日午前10時1分、和歌山県串本町並